

育英事業に尽くした大実業家 藤田謙一 ふじたけんいち

藤田謙一は一八七三年（明治六）一月五日、弘前市五十石町に生まれた。父旧弘前藩士明石永吉、母ともの二男である。兄弟七人であったが、親戚の藤田正三郎に子がなかったため、五歳のとき養子になり、十二歳で藤田家を相続した。しかし、小学校時代は実家の明石家で育った。

五十石町の生家は、明治維新後の士族の例にもれず、生活は極めて貧しかった。そのため屋敷の手入れもできず、生垣などは荒れ果てて人間よりは犬でも出入りしたら丁度ちやうどよいとうわさされるほどだった。

しかし、少年時代の謙一は、貧しいながらも、しあわせに成長した。一八八〇年（明治十三）謙一は五十石町の自彊じきやう小学校に入学した。当時の小学校は初等科三年、中等科三年の計六年であった。謙一が初等科二年のとき弘前で傷寒しょうかんが大流行した。傷寒というのは熱病のはげしいもので、今日の腸チフスのことである。謙一の両親は伝染しては大変と思い、あわてて謙一を母の実家である佐藤家にあずけることにした。七人もの兄弟の中で、謙一だけがあずけられたのは、身体が虚弱だったためだが、将来藤田家を相続する身に、もしものがあれば申し訳がないという父母の配慮によるものであった。

父の永吉は維新のとき、弘前藩士の一人として函館戦争に従軍し、幕府軍と戦った経験があった。それだけにしつけが厳しく、毎朝子供たちに撃剣の稽古をさせた。父は冬の朝でも容赦ようしやしなかった。雪の上を素足でへトへトに疲れるまで、自分が先に立って稽古を続けた。だが、謙一の身体虚弱は相変わらずであった。

謙一が小学校中等科二年のとき、自彊小学校は袋町の博習小学校と合併し、城西小学校と改名した。謙一は城西小学校に転入学する。

城西小学校での受持ちの先生は藤田愛之進であった。藤田先生は元氣はつらつ潑はつらつとした青年教師で、謙一はこの先生にかわいがられ、鍛きたえられた。藤田先生は、

「津軽男子が寒がるとは何事だ！ 元氣を出せ元氣を！」

と生徒たちを寒中に素足で校庭に出して、雪合戦をやらせたり、腰まで埋まる雪の中で旗取り競走をさせたりした。先生は一着になった者に凍しみ豆腐とうふ一つを賞品にくれた。しかも、貰った凍しみ豆腐は、その場で食べなければいけないが寒中にガリガリ食うのは容易でない。困ってまごまごしていると藤田先生は真赤になって怒った。

運動が終わって教室に入ると、先生は、

「おい、肩たを叩たたけ。」

と生徒たちに命令する。そこで生徒たちは交わる替わる先生の後に回って肩を叩くが、腕力の強いやつが出ると、

「うん、お前は力がある。」

と褒めるが、背がひよる高いばかりで力のない謙一の番になると、

「謙一、お前は駄目だ。そんなことではブケだぞツ。」

と怒鳴りつける。藤田先生のこのスパルタ教育が、謙一にはこたえた。が、挫けなかった。

「よし、おれだつて元気を出すぞ。みんなに負けてたまるか！」

それからの謙一は、体力をつけようと毎日相手を選ばず相撲をとった。しかし、いくら勇猛心を奮い起こしても、謙一の相撲は弱く、だれとやってもコロリコロリと転がされた。

だが学科の方はこれとは反対で、進級するたびに成績があがり、一八八四年（明治十七）十一歳で卒業したときは城西小学校で五番だった。卒業した謙一は郡立中学校にも東奥義塾にも入学せず、母方の祖父佐藤貞助と、貞助の長男で謙一には叔父に当たる恭助について、『十人史略』『四書』『五経』など漢文を学んだ。

一八八五年（明治十八）弘前の大成小学校に高等科が併置された。これは翌十九年の小学校令公布に先立って、臨時に設けられた高等小

学校だが、謙一も同級の鹿内元弥や北上敬造（のちに貢と改名）と一緒に入学した。大成小学校高等科は市内小学校中等科卒業生の集まりだったので、各小学校ごとに小さな閥ぼつができ、朝陽や時敏や和徳などから入学した山田金太郎や「桑田の赤鬼」などという腕力の強い連中が大威張おおいばりで、城西派の謙一や鹿内元弥などを、いつもいじめていた。ところが翌年、弘前高等小学校の校舎ができあがって全員そこへ移った。そのとき城西から青沼金蔵や高橋八十太など、腕力の強い連中が入学して来た。謙一と元弥は大喜び、虎の威を借る狐といったかっこうで、「敵かたきを討うつなら今だ。」とばかり、腰こしに十手じゅうてと煙草入れをさして登校し、「赤鬼」といわれた桑田くわんかに喧嘩けんかを売りつけた。だが運わるく先生に見つかって、二人とも十手と煙草入れを取り上げられてしまった。煙草入れは二人とも父親のものを盗み出しただけに、謙一と元弥はその後一週間ばかりも青い顔をしていたという。

弘前高等小学校を卒業した一八八七年（明治二十）二月、藤田謙一と鹿内元弥は東奥義塾中学科に受験することにしたが、二、三人の同期生と相談し、

「われわれは高等科を了おえたのだから、中学科三年に編入試験を受けよう。」
と決めて皆で猛勉強した。

謙一と元弥は国語や作文が得意で、誰にも負けない自信があったが、肝腎かんじんの数学が弱かった。だがそのころの試験は現在のように厳しく

はなく、先生の処とこに行つて尋ねると、試験問題の出る範囲を教えてくださいるようなんびりした時代であった。そこで謙一と元弥は東奥義塾の数学教諭成田彦太郎を訪ねて、

「算術（数学）の試験は上下巻のどちらから出ますか。」

と聞くと、

「そりや下巻にきまっている。」

と、先生は答えた。

二人は、しめたとばかり一生懸命下巻の勉強をしたが、試験問題は案に相違して上巻からばかり出た。おかげで二人とも見事に不合格。

城西小学校時代五十番だった北上敬造は合格して大威張りなのに、五番だった謙一と六番の元弥が、そろつて落第したから珍妙である。謙

一は「落第したから仕方がない。おれは一年生に入学するよ。」とあっさり東奥義塾一年生に入学したが、元弥は「一年生に入るなんて馬鹿馬鹿しい。」と一年間ぼんやりと遊んでしまった。

謙一が東奥義塾で学んだのはわずか二ヶ年にすぎなかった。十七歳の時にはもう学資が続かず、中途退学して青森県庁の雇員となった。

東奥義塾在学と県庁づとめの三年間が、謙一の少年時代を飾る思い出であり、それまでの引つ込み思案から解放的となり、大胆に行動し

始めた転機でもあった。読書に励み、ことに歴史物や偉人伝を好んで読んだ。

謙一は鳴海堯策や三浦真(まこと)(のちに陸軍少将)、鹿内元弥らとよく語り合って『覚眠社』かくみんしゃを組織したのも東奥義塾在学中のことである。覚眠社には佐藤洽六(のちの紅緑、小説家)も参加し、機関誌『覚眠』を発行して大いに氣勢をあげた。謙一は文章家として覚眠社中随一といわれたが、詩や小説では佐藤洽六が断然他を押さえていた。洽六の大胆な筆致と少年に似合わぬ人心の機微をつかんだ描写は、大いに将来を期待された。このような仲間と語り合っているうちに、少年謙一の心が躍った。

「東京へ出よう。東京へ出て、自分の力をため験してみよう。」

一八九一年(明治二十四)八月二十四日、謙一は月給六円の青森県庁雇員を投げ出し、養家藤田家の金百五十円を無断借用して、そのころ開通したばかりの東北線三等車に乗って青森を出発した。東京で苦学をする積もりだった。この事を謙一は誰にも打ち明けなかった。自分一人で決心したのだが、前途を思うと流石さすがに不安だった。が、不退転ふたいてんの決意はさらに強まった。

東京へ着いた謙一は、神田錦町の矢部愛子という婦人が経営する下宿屋に居を定めた。そこにはすでに上京遊学している城西小学校時代の友人北上敬造が待っていた。謙一は将来、判事か弁護士になるのを夢見て、一八九一年(明治二十四)十月、明治法律学校(現明治大学)に入学した。法律学校在学中の謙一は、学業行動とも優秀だったので、同校創立者の法学博士熊野敏三に認められ、何かと目をかけてもらった。

一八九四年（明治二十七年）七月、明治法律学校を無事卒業したので、かねての志望通り判事、弁護士の試験を受けた。だが、この年から試験科目が、これまでの六科目から十科目に増えたため、不幸にも謙一は落第をした。東奥義塾三年編入試験以来、二度目の落第である。どうも謙一は受験に弱いようだが、後に謙一が五人の息子に「教科書の虫になるな。」とか「男子は正しいと思ったことをやり抜け。」と訓戒を加えているところを見ると、受験のための勉強がきらいだったのだろう。

判事や弁護士試験は落第したうえ、豊かな学資もなく「どうしようか？」と迷っていると、熊野敏三が「うちに来れば良い。」と言ってくれたので、熊野先生の処で二年程厄介やっかいになった。謙一は貧乏な家庭に育ったが、人柄が素直で明るく、そのうえ津軽人には珍しく社交性に富んでいた。そのため人に好かれ、かわいがられた。熊野先生が謙一を食客しょっかくとして迎えてくれたのも、謙一の明るい人柄を認めていたからだろう。

しかし、いつまでも熊野先生の処に厄介になるわけにもいかない。謙一は、一八九九年（明治三十二年）二月、栃木県属に採用され兵事係兼学務係に任ぜられた。ここに半年余り勤務し同年九月には大蔵省専売局に転任した。専売局に二年勤めたが、後に謙一が実業家として大成する基礎は、実にこの専売局入りによって築かれたのである。

当時政府は煙草を専売にしようと計画し、日本の煙草業界の大手で「天狗煙草」を売り出していた岩谷商会を買収しようとしていた。買

収するには安い方がいいから、政府は計略をめぐらし、外国煙草を輸入して、岩谷の「天狗煙草」と外国煙草の販売合戦をさせた。計略は当たって「天狗煙草」の売れ行きが落ち、岩谷商会は今にも没落しそうになった。そこで岩谷商会では店の建て直しを図るため大蔵省専売局の属官である謙一にたのんだ。再三懇望こんもうされて謙一もその意気に感じ、大蔵省を辞任して岩谷商会の支配人となった。これが藤田謙一の実業界入りの第一歩だった。

岩谷商会入りした時の謙一の月給は二百円、現在の金額にすれば百万円にも当たるとであろう。謙一は毎日、商会建て直しのため東京市中を駆け回った。謙一の明るい人柄と社交性が、実業家に向いていた。そのうえ法律の知識と大蔵省勤めの経験が役に立って、岩谷商会の建て直しに成功したのである。謙一は商会を会社組織に変更して、専務取締役となった。これによって藤田謙一の名は、東都実業界で一躍高くなったのである。

次いで一九〇四年（明治三十七）の日露戦争のとき、岩谷社長と謀はかり日韓印刷会社を韓国のソウルに創立し、明治四十年には社長になった。一九〇七年（明治四十）名古屋の豪商小栗商店が破綻はたんをきたし、通信省（今の郵政省）経理局長関宇喜せきが前後三年にわたってその整理にたずさわった。が、どうにもならず持て余したあとを、謙一が引き受けることになった。謙一は苦心を重ねて、見事に小栗商店を再建した。

このときから藤田謙一の経済的手腕は、財界の等しく認めるところとなった。この小栗商店の整理がきっかけとなり、謙一は台湾製塩会社

の専務取締役役に就任、その経営支配の実権を握り、日本の財界に大きな地位を築いていったのである。

藤田謙一が参画した企業は、南樺太石油、常南電鉄、満州人絹パルプ、明治採炭鉱業、長門起業炭鉱、北海道拓殖、東京毛織、日活など五十有余に及び、自ら社長となって経営を担当したのも少なくなかった。また藤田謙一が所有した別荘は、最盛時には三十八ヶ所もあり、東京赤坂の星ヶ岡茶寮も謙一が所有したものだったという。

一九五五年（昭和三十）青森県出身の代議士楠見省吾がラテンアメリカ協会の発起人会に出席したとき、同席した一万田尚登蔵相、藤山愛一郎外相、足立日商会頭などが藤田謙一を話題にして、「あれだけスケールの大きな実業家は、今後日本の財界に出現しないだろう。」と異口同音に言ったという。楠見省吾は「このことから藤田謙一の実業家としての偉大さがわかる。」と、その手記に述べている。

さらに藤田謙一を偉大ならしめたのは、所有する巨大な財力を投じて育英事業に取り組んだことであった。青少年時代、学費が乏しく苦学した体験をもつ謙一は、才能がありながら学費がないため進学できない青年たちに、深い同情を寄せていた。そこで一九二一年（大正十）、郷里弘前に官立弘前高等学校が創立されたとき、個人として最高額の一万円を寄付した。さらに二十五万円の大金を投じて、東京と弘前に藤田育英会を組織設立し、多数の英才を訓育し、欧米に留学生を送ったのである。郷里に高等学校ができたのを機会に、不遇な秀才を世に出そうとした謙一の愛郷心には頭の下がる思いがする。

謙一が設立した藤田育英社の社屋は、当時の東京府荏原郡大井町（現東京都品川区）に近い蛇窪に建てられた。藤田家本邸にも近く、二階広間にはピンポン台が、庭にはテニスコートなどもある堂々たる施設で、弘前出身の学生を中心に、他県出身学生も收容していた。初期の藤田育英社には田村清三郎（のちに青森県教育長）、斎藤義雄（のちに医師・開業医）、小山敏夫（のちに県立浪岡高校長）などがおり、他県出身者では時子山常三郎（のちに早稲田大学総長）、玉虫文一（のちに東大教授）などがいたが、謙一の育英事業の世話になったものは、この他にも百名を上まわる。藤田育英社の舎生たちは社誌『藤園』を創刊し、一九二五年（大正十四）以来毎年発刊して謙一の徳を贅え、各自の勉学の励みや友情の交流に役立てた。

謙一は舎生に訓示するとき、物事の報告のしかたについて注意することが多かった。「……だと思えます。」というような報告のしかたはよくない。「思いますではわからない。もっとはっきり確かめて、……です。と報告しなければならぬ。」と注意したというが、いかにも実業家らしい言葉である。

これより前、一九一八年（大正七）ごろ、郷里弘前に帰った謙一は、中津軽郡岩木町の岩木山麓枯木平に八〇三ヘクタールの開墾かいこんを行い、広大な藤田農場を設けたが、一九二八年（昭和三）七月、農場をすべて母校東奥義塾に寄贈した。そのとき謙一は、母校を訪問して一場の演説を行ったが、

「何事も奮闘努力をすれば必ず成るものである。後輩よ、英才よ出よ、大志は努力によってのみ成る。」

と訴え、なお語を継いで、

「自分はいま事業を行い財を成しているが、人は一生を生きて行くのに費用はいくらもかかるものではない。日に三度の食事でする。衣は寒暑を凌げばそれでよろしい。住宅も一軒あれば用を弁ずる。従って成した産は後進者の育英のために捧げる考えだ。」

と育英事業に対する執念を披瀝している。

一九二三年（大正十二）謙一は弘前市上白銀町二番地に公会堂を建築して市に寄付した。木造三階建の堂々たる建築で、その面積五四・二五坪（約一七八九平方メートル）、付属建物三棟である。敷地、建物、装飾、什器など合わせて十五万二千八百八十九銭を要したが、謙一はうち十一万四千円を負担し、残り三万余円は弘前市が負担した。公会堂は一九五八年（昭和三十三年）に解体されたが、現在の市庁舎別館の土地に建てられていて、長く弘前市民に親しまれた。

一九二八年（昭和三）一月一日、藤田謙一は東京商工会議所会頭に選ばれた。そして日本経済の中心的存在として、折からの金融恐慌の経済的混乱を切り抜けた手腕は、今も多くの経済人に語り継がれている。また同年三月スイスのジュネーブで開かれた第十一回国際労働総会（ILO）に使用者代表委員に指名され、会議に出席するため、シベリア鉄道を利用してスイスに向かった。シベリア大陸を縦断し、ド

イツのベルリンに到着すると、かつて藤田育英会の学生だった玉虫文一が訪ねて来た。玉虫は東大から派遣されてドイツに留学中だったのである。はるか異国にあつて相見えた師弟二人——おそらく謙一は育英事業に打ち込んだ幸福をしみじみと感じたことであろう。玉虫は藤田について次のように述べている。

「藤田先生は私にとって真に生涯の大恩人である。幼くして父を失った私は、もし先生の御愛顧と御援助を受けなかったならば、どうして現在の立場に至ることができなかった。しかし、このような私も先生にとっては多数の中の一例にすぎなかったであろう。先生はさまざまな志を持ちながら、恵まれない境遇の青年に対して、愛情と激励をもって援助の手をさしのべられたのである。実業家、経世家として藤田先生の成し遂げられた偉大な業績については、私もひそかに見聞しているが、それについては他の多くの方が述べられるに違いない。さきにも記したように、先生は厳格な中にも温情をもった人格者であり、また私情をこえて公共の為に骨身を惜しまれぬ人柄であった。稀に見る清廉潔白な方であり、権力や財力を私的に使うことを厳しく戒められる方であった。先生はまた極めて視野の広い国際人だったが、同時に日本人として——特に東北人としての気迫と誇りを持っておられた。そして心から郷土の風物を好まれ、郷土の人々を大切にされた。津軽富士、岩木山を背景にして藤田農場に立たれた先生のお姿こそ、われわれにとって最も親しみ深く、忘れがたいものだった。」

右の玉虫文一の述懐には、藤田謙一に対する敬愛の情が溢れていて、読む者に感動を与えるが、藤田謙一の人間像を最も的確にとらえて

いる。

藤田謙一は一九二八年（昭和三）四月四日、貴族院議員に勅選され、また実業界における長年の功績によって、勲三等に叙せられた。

藤田謙一は五男二女と子供に恵まれた。男の子は大学を卒業して、それぞれ実業家として成功したが、四男謙介だけは太平洋戦争に従軍、南方において戦死した。謙一は一九四五年（昭和二十）秋ごろから体調を崩し、応召中の三男謙友が終戦で復員したときは、自宅において病臥^{びょうが}していた。十一月末になると病状が悪化して慈恵医大に入院した。三男謙友が病室に寝泊まりして父謙一の看病に当たった。謙友は看病を通して、初めて父としみじみ語ることができたと述懐している。さまざまな事業に参画した謙一は、子供たちともゆっくり語る時間さえ見つけることができなかったであろう。

病院で年を越し、一九四六年（昭和二十一）三月十二日、謙一は満七十五歳で生涯を閉じた。葬儀は東京築地の本願寺別院で執^とり行われ、藤田育英社を代表して原為信が涙ながらに弔詞を述べた。原は藤田育英社の援助で明治大学に学び、後にアメリカに渡った。アメリカで十七年間生活をし、戦後の東京裁判でキーン検事側の通訳官、翻訳官をつとめた人で、藤田育英会出身者の集まり「藤華会」の会長でもあった。

参考文献

弘前商工会議所編『弘前商工会議所六十年史』一九六八年（昭和四十三）弘前商工会議所
東奥義塾『東奥義塾再興十年史』一九三三年（昭和八）東奥義塾友会

東奥義塾『東奥義塾再興三十年史』一九五二年（昭和二十七）東奥義塾塾友会

藤田育英会『藤園』一九二五年（大正十四）藤田育英会

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一八九～二〇一頁